



謠曲拾葉抄

賀茂
竹生寫
忠度
藥平
寶盛

三





賀茂

上賀茂社、在山城国愛宕郡去王都北半里許山麓。諸社根え記云上社一座別雷神也。倭姫世記云若雷神号賀茂社。下鴨社在王都東北數百步平林中。諸神記云下社号御祖社二座一座王依日賣別雷御母一座松尾大山咋丹塗矢。神名帳頭注云御祖社一社大己貴子大山咋神也。一社玉依日女也。二十二社次第云御祖社別雷神御父大山咋神也。松尾日吉同躰也。公事根源云此神祖の神と云玉依姫とP. 媛媛建角令下の娘也。

社家説云當社鎮座雖經年序天武天皇白鳳五年
丙子從被造宮增有御崇敬矣 二十二社次第云
天武天皇六年二月宮社壇後一條院行幸之時寄
進山城國因為當國惣社矣 長明に孝如儀云
社いじりしやあゝのくふ。多鴨小のーはひ
しと。夫のまらさのさあはら。さ
らさのーら。はるるふらさんささひ。さ
いらーらさあひーまーぬ。はれのらーめの
まふらん。のらーくのふふ一のまをさあはひ
日。はるらささ。さ。さ。のさのー乃さふさあ
らん。さささくもさーささささささ

大江匡房記云賀茂神者日本國地主神也矣

太子瑠璃記云凡帝都守護の神明りつさるる

りつらりつと。別々賀茂の神の守護神也

或云山城風土紀云可茂社稱可茂者日向曾之峯
天降坐神賀茂建角身命也神倭石余比古之御前
立坐而宿坐太倭葛木山之峯自彼漸遷至山代國
里曰之賀茂隨山代河下坐葛野河与賀茂河所會
至坐見廻賀茂川而言雖狹小然石川清川在仍名
曰石川瀬見小川自彼川上坐定坐久我國之北山
基從余時名曰賀茂也建角身命娶丹波國神野神
伊可古夜日女生子名玉依日子次曰玉依日賣玉

依日賣於石川瀬見小川遊于時丹塗矢自川上流
下乃取排置床邊遂孕生男子至成人時外祖父建
角身命造八尋屋堅八戸扉釀八腹酒而神集々而
七日七夜樂遊然与子語言汝父將思人令飲此酒
即举酒杯向天為祭分穿屋甍而昇於天乃因祖父
之名号可茂別雷命矣 曰事地祇本紀云大己貴
尊兒味鋤高彥根命坐大倭国葛城上郡高鴨社神
云括篠社此神有勢美兒勇氣又任護国任意風雨
故父太神以倫獨敷用讓此神遊国々成雷淋其雨
養田或時成雷分雲昇天謁日神月神天祖天尊神
請国政之任 中畧時月讀尊為水任信以天高田葵

乃授以下之遂成雷分雲下而至於山背国御城上
縣永鎮坐以天真并水盛包葵葉將為御手洗故名
分雷神 下畧

當社法衣のあり。秘奥なるふ依く。社家多
記と秘し。く。く。次。況。律のあり。と。八。不
の抄社家社等のあり。と。同し。
神祇正家云社家神秘し。く。り。多。あり。小
多。あり。く。く。く。く。 洞林系葉云大明神
乃。あり。社家の法秘し。く。あ。氏。人。あり。後。り。首
あり。あり。上。古。の。あり。く。く。あり。こ。子。細。を。知
人。あり。あり。あり。あり。く。く。

袖中抄云尺さしり川に神の末前の川と云く
つらこの神も河あつた續へしと云く

賀茂小不限和忍妻日不此は改河をいふ合を
いふありき。賀茂の末は改河の自本まあるを

云二鳥居間河海抄云尺さしり川の神と云り
流さしき賀茂の社夫布絲片是の杜乃中よ

と流さしき河と云く
注進畧記云加毛神日向龍峯小天降坐と漸

山背の畧田不後と抄ひ石川狭見小川と見也
らしき流さしき不淨めを洗世抄みある

は改河と号と云く
神も人よ改河なりあるの流さしき世と云く 雅者

神をたごの乃と云ん 河合七瀬の二と只瀬
多田須直澄と云く。或は高野川と賀茂川と

此杜の末と云く落合也よ河合た云く
社家説云河合玉依姫也 年中行事秘抄云河

合社伴神是御祖別雷兩神苗裔也
名川まは浮世の人乃つらつらと云すの末よと云て
るる法

と云く云く云く云くこの教也
と云つと云く 奥義抄云六月農のつらと云

と云く云く云く一月と云くと云く云く
或云く云月は月依小署してあると云

くろあふ。あやう一月しちを累し〜く〜あづ〜
ひつり〜

▲秋稻もあふ。秋稻川水も清し〜と云ふ

秋稻川ハ兵部川と云ふ。六月晦日社家此川に
出〜ふ十串と云ふ。ゆ〜の葉あ〜し〜後を〜
とる〜。是〜とる〜の秋とい〜。

或抄云六月後ハ天武帝の御宇〜より始〜。
分類玉露集云名越秋。六月晦日也。夏秋交代之候
而夏火秋金。火与金相剋故越夏之名。攘相剋之災。

矣

○鴨川のあはた院と照月をゆ〜んを〜夏後する

る〜あ〜夏後ハ月と〜む〜夏〜昔ハ
晦日ハ〜限ハ月中ハ使置ゆ〜時。秋去り〜
定家つ〜必〜晦日ハ〜限ハ月河原ハ〜秋後
又納涼及〜糸竹の遊あり〜。

▲但大後と云ハ六月晦日の中〜る根原ハ〜
〜もす〜あ〜桶のり〜秋〜ぬ

り〜熱〜ぬ〜い〜と〜糸竹の〜あ〜り〜月
の〜也。倭名抄云蔣鮎切韻曰桶汲水於井之器

也。出。川水と〜の〜あ〜り〜ひ〜け〜ち〜あ〜馬鞋ハ

▲ふ子振ハ田村ハ流と〜の〜あ〜河川ハ流と

附日ハ夕月也

夏らしきものの河隈 渾しとくは小舟の暑さを
あきらめんかたきものと。夏らしきものといふと。河隈の
渾と小舟と

源英明詩云池冷水無三伏夏松高風有一声秋其

○と渾やうごの氷室のうごもあつたものよと渾
とくは小舟の暑さをとくは小舟の暑さを

渾しとくは小舟の暑さをとくは小舟の暑さを
上賀茂本云の乾イの方小舟生壇ニとくは小舟の暑さを
假殿の四跡シ。或は候カ寝跡ニ色ハたス。葵ニ系ト
願連ニとくは小舟の暑さをとくは小舟の暑さを

此は小舟の暑さをとくは小舟の暑さを
壇とつとくは小舟の暑さをとくは小舟の暑さを
つとくは小舟の暑さをとくは小舟の暑さを

白羽ハ矢ハ四ハ紀ハ小丹塗ハ矢ハとくは小舟の暑さを

輪大神成鳴鑼矢鳴テ至皇跡ニ矣其 神社考云昔城北

出雲路有リ小女浣衣鴨河一箭流来鴨羽加テ笞ニ取テ
歸家ニ排テ之ヲ檐ニ牙ニ下ニ界ト

此は小舟の暑さをとくは小舟の暑さを
未見澄文ヲ

渴仰長水楞嚴注曰渴仰者思渴ス瞻仰也其

潘安仁西征賦云如渴心翹勤以仰止注如渴如飢
者思賢人而仰止之矣 渴作と咽の渴時を欲

ぐくぐくあふとく候と起とととと。毒く大湯小
壇、孝声切韻曰壇封土四方而高也

兵 鄭玄注礼云封土曰壇除地曰壇

漢書音義曰築土而高曰壇除地平坦曰場

白本綿ハ蟻通ニ記ト

▲ありーさよ 千壽よ記と

▲あざぐあ 鮮々あときあ。あさやのふるり

▲昔此、賀茂の里小秦の氏女トリ一人

秦の氏女トハ秦氏の女ト。玉依姫と云依く

下社と秦の依く号と

秦氏本系帳云初秦氏女 玉依日賣 出于葛野河洗濯

衣裳時有一矢自上流下女子取之還来刺置於戸

上於是女子無夫懷妊既而生男子也父母恠之責

問、爰女子答云不知云 云曰茲弁備大饗招集諸人

玲彼兒執盃祖父母命云父止思人仁可獻之于時

此兒不指衆人仰觀行指戸上之矢即使為雷公破

屋棟升天而去故鴨上社号別雷神鴨下社号御祖

神也戸上矢者松尾大明神是也 是以秦氏秦祭三

取大明神而鴨氏人為秦氏賀也秦氏為愛賀以鴨

祭讓与之故今鴨氏為祢宜奉祭此其縁也

▲物々分れをふあくあくとく

右今、祭雅抄云物々分れあくあくとく。空変と云。

従又火雷の由縁より此の若島と名づく。此の
けふもお通せり。此等の事よりして此の島とい
ふゆゑん。一伝云別島といひも此の事也。

住進畧記當社神詠

千里振別高ロケツケ 宇奈志形ノケ 一と天々々々々々々々々々々々
又此の島を高と稱せり。高。万葉集才と云

一伝云別島といひも此の事也。
依えおえおらいつらといひ此の名と云々

其母もとも神と云々。又云上賀茂中賀茂
母尺と云い玉依姫也。拾芥抄云下鴨御祖皇太
神二前。上賀茂別雷皇太神一前矣。

是と賀茂と云と云々。又云上賀茂中賀茂
下鴨是と云云。網林系系云片屋法を
ハ中賀茂と云。鶴ツル屋小法度。多田須良と云。号
下鴨社降祖神と云と云々。

片屋亦名云鶴岳本宮構門外川東南也

神社考云母又同時登天今之賀茂中祠昔為田中
時田主播秧其苗俄變成槻樹母氏降樹下為神今
賀茂中宮是也矣

いふと云々。やとけの人の。万葉集白檀と云。
昔いらと檀キハのゆとけの人の。やとけの人の。いふ
と云々。

弓矢も小舟もさへあり 弓矢といふ文武のさへありと云

言ふ。弓矢の乃乃かやちやのさへよむるまをさへあるらん

賀茂の河原もつら名の 社家之鴨有七瀬川

名賀茂川宮川羽川石川瀬見小川月輪川小舟渡

川大舟川

下り他川よりかき河 石川の氷より小石川も縁さの

奥よりありあく、東へ大和橋へ流さると東へは東との

るあく、鴨川も流合あり、墨田に流さる。

徳のふり下りてく川と云のさへさへいふちりてい

りもいさかのさへさへいふちりてい

石川や瀬尺の小川乃流りれり月も流さるを流さる

新古今集神祇部小鴨長明云く洞云と鴨社の云

合とくくくくみゆるわくくく。音乃乃く月も

一入流さ流さを流さるくくく。長明抄云瀬

見の小川のかき川の實名と。南社の縁起あり。

此石川瀬見の小川長明ゆくくくくのち流は

船は頭取なりと云あり

一季の矢乃よくもさるる長法 季の矢といふ月日の

さへりさ矢を射ることくくく。さへりさるさへ

射不流と

河のハ本の水 長明方丈記云石川の流さる

さへりさる。さへりさる。さへりさる。さへりさる。さへりさる。

かもし乃川瀬の水といひりあるふるらん

鴨川に社乃東の方小滝多し水と六車坂の榊より
あつこ

白玉の喜ありあや美糸川 亦小美糸川とよじ

小の白玉或は玉ちり分くあり。美布糸の狭橋後千

あもあく見えし大井川流れの紅葉のふくむ

賀茂川乃あつこをあわら次あふそより大井川

之六歌法滝多舟の滝多しとれとせとつてはる

後拾遺集秋下中納言定頼大井河少とよみ結
りる

かもしあく見えし大井河少の紅葉いぬとせは

あのみい紅葉の多く流せしとよく。常いあふ

せいのああわし。その紅葉の飾り小滝あつてはる

あつこあつこ小見あつこ大井川の石乃少滝と

嵐乃そこの戸難ヤ瀬ヤなる 戸心戸難瀬いぬは榊は流

流滝川のあつこあつこ根のそとせけぬと

新古今集表とあつ法師

流つしとる松の流も急トホりり流滝川のあ乃白波

東野別云流滝いぬアマ定コ多シ雄ガの禁シ。流滝しと

あつて。結句小見波とつる賢ト也ト。そとあつて

あつて。結句小見波とつる賢也。そとあつて

清滝川の流く流りくをんとく。板のなる板のなる
もとけゆくも。さとりあきるるくしき

清滝川の丹波よりあきく。梅尾トウノヲなる旗のおを流
まじく。さくハ大井川不乃るこ

くすぬ音羽の滝波いうけてかいらの巻しのも

音羽の滝ハ山城ハ不乃る。一ハ清水の滝。一ハ
お取乃ち音羽ハ不あり。一ハ比叡ハの梅原ハ
亥小く。ハ比叡ハの音羽の滝。

類字名寄云在西坂本松室所トシニ

古今秘抄云白川音羽滝ハ雲母坂の上。水音涼の
地蒸雲の目さより流りて滝しき。

くすぬ音羽といつげらハ人のもてくもあはれ

古 落滝津なるのあともつりり老ふりしり黒く新

是ハ比叡ハの音羽の滝をよありこ

長嘯叡ハ不りてくんらるるふあそふ
くらさくくらあしつひらん音羽の流の白糸
くら人毎ふふある人のつふさる滝ハ
小くくくくくくくくくくくくくくく
よあふりりくくらあしき

老くく と井きふら

西くくくくくくく 源氏桐つかのくくく

やんしあきあきあきあきあきあきあきあき

へくあがつくり 上上畧

應仁記云板又及の海とく。法も足舟の志
海ぬふひやーむすひー大和瓜

沢庵和尚東園記云ゆつふふと夏とあひ可く
夏とくもいりであつこのまへの海とくん月の海

私とすくくといふといふの細むりのまの海
ふもすーとを神ふとり細むりとくふふん

此方のふふくもふふー
私と藤垣ふふくもくもくも他世のふふ不承也と

らく修くち方つふくもくも

我の是五城を守り君臣の乃別高の神と

豊葦原卜定記云此後建角身命国々於見巡之御

座 須 於是天 鈿女命 磐樟船 乎 槽奉 利尊 於神代 乃

浦乃浪静 奈由磯 未天送利 御座仍天 乃神与利

賜之神室 乎以天 此国乃固止 成世王 北山乃麓

仁應化之百王 於守利玉布 經津主武雷神 母同此

所仁垂跡之玉 陪利上畧
吉記云或古記云平安京百王不易之都也東有嚴
神西仰猛靈巖神者賀茂太神宮猛靈者松尾靈社
是也依二神之鎮護期万代之平安然則永々不可
遷宮矣

新編古
竹生嶋

或の法天管神と如く虚空よりあり
此公旧事を紀を引くと云ふ記を

和光同塵結縁 竜田の記を

風雨隨時の云々 白氏文集六十

一日天地氣和風雨時若矣 日本紀仁徳天皇卷

云風雨順時五穀豊稔矣

續日本紀云天下太平風雨順時五穀成熟矣

多うりいかつまの稲多ふ乃多うりもやうり川と云ふ

。秋の夜ふいく交中鳥と云ふんらふ多うりやうり稲多ふ

五穀成熟も その字を一字入ると云ふ

竹生嶋

竹生嶋神社在近江国浅井郡所祭神一座宇賀御

魂命也 神社考云昔行基菩薩来此嶋神女現

形逢基基初建寺置弁才天女像云云此嶋弁才天者

所謂南閻浮提中有湖海湖海中有水精輪山即天女

所住也是曰大弁才功德天女本地法身大士而好

音樂故名妙音天女無迹于此因号竹生嶋大明神

矣 旧事神皇本紀曰景行天皇十二年淡海湖水

甚然炎端均日見熾終日烘々不滅至初更地震二

更尚不止三更漏出嶋炎出從嶋首嶋出火消地震

又止神女坐嶋頭白龍迴嶋腹鬼形兵形充滿嶋中矣

色葉字類抄云昔淺井姫命与気吹雄命競勢争力更去北边下坐海中其下海音称云都布々々故云都布夫嶋即件神疑水沫而为盤積風塵而作嶋又召諸魚令運重石今云真埼真進集之处也召諸鳥令落殖木種今狘衆鳥来集之峯也此歷功長成林

最初竹篠出生故云竹生嶋下畧

都良香詣竹生嶋作詩三千世界眼前尽十二因縁

心裏空和漢朗詠集江談云古老傳云都良香此詩

のよ、句とゆく自覺~~~~。下句とゆひひひ

りりふ。嶋のてふ才天多中ふ下句とゆひひ

現其形如天女頂上有宝冠冠中有白蛇其蛇面如

老人眉白此則每諸佛出世秦達利益衆生年久瑞

相後此神王身如白蛇如白玉有八臂无牙一鉾牙

二輪宝矛三宝弓矛四宝珠右牙一劔矛二棒矛三

鎰矛四箭頂有如意宝珠圓光後有十五王子其秋

童子也或時面々持三广耶或同執如意珠圍繞神

王无石云云

竹小生々々の竹生嶋まじりて云うん

竹小生々りくるとい竹生嶋まじりて云うん。あな竹小

島ハ文の對句なるまじり竹小生々々々といまじり。

家。百島のまじり竹小島のまじりて云うん。竹生嶋

竹生嶋

雞籠百々山

山後の葉生小とく伏るまであゆみかよひてふりしき 是家
神社考云竹生嶋者在江列湖中其巖石多水精宝
珠本朝五奇異之其一也傳言孝靈天皇四年江列
地折湖水始港駿列富士山忽出焉景行天皇十年
湖中竹生嶋初涌出 當社の巽は向へて延喜式
一都久夫須麻と云或ハ筑生治と云治の周ハ
十町許山のまゝに敷く十町半とのまゝに
くもまゝに下ぬ山ハ皆とまゝにハ茂り山の根ハ
岩石めくまゝにさなる一社も亦も皆ま
まのまゝに一は小なりく其餘ハ皆石崖のまゝに
氏家ハ一字もなし縁起の流小をとも思ふ

山本社宮寺と号と。社傳の寺十坊あり。皆

岩石のまゝなり。地甚々セリ。社領之石

日吉百々山
○月不たゞ依りて今も竹生嶋流ふらりあけのむね 隆祐

源是の延喜の聖帝不はまゝに下り

帝王編年記云六十代醍醐天皇諱敦仁宇多天皇
第一皇子母贈皇太后藤原子内大臣高藤女也仁
和元年し酉正月一日誕生寛平元年己酉十二月
廿八日し酉親王宣下 同五年癸丑四月二日
立為皇太子 同九年丁巳七月三日受禪同十
三日於太極殿即位御宇三十三年都平安宮延長
八年九月廿九日崩御年四十六十月十日奉葬山

カ庄鳥

科山陵

科山陵三 柙の字の音少くはるを帝といはれ

美の洞と。下ハ墓、よふはる也。

池の宮や河原乃ま長 盛久小治也

名も走こ井の水乃月 走井ハ近近分分と大井の原。

大谷と云ぬ少を井とく。南の方ふあのこと

あら井と云。雲守のよふし。

後右 〇逢坂の雲と云ふけとを井のあといえをさくめれ 堀川太政大臣

〇逢坂の雲乃ま長ハ蟬丸。少能もと云志賀の里ハ

三井寺。少井の浦ハ源氏伏見。面白ハ三橋。跡ハ

田村小治也。

〇あらしと云る物けしけ ありと云るといふあのだる

いとたるといふこと。物けしけハ長安少治也

〇志賀の朝花堂とい三井寺。昔なるくのよ橋ハあま

小治也

〇美野のくいのあよびい 美野ハ志賀、朝ハ美野

のくいの今ハ田地と云るぬ。唐橋よと云。拾列

大和奥列ハ同名あり。あよびいといふと云ふこと。

新後撰 〇志賀の浦ハ赤漕と云る音とくくの浪ハ月と云る也 内眼源兼

〇誓まじのあよふと云るなり 弁天經曰第五王子名船

車童子ト矣

〇く浮や志賀の浦 三井寺小治也

〇赤い海のと云ハ近ハ乃いふと云

竹生鳥

帝王編年記云孝灵天皇五年乙亥近江水海湛始ハ湖海サシ盈キヨ虚キヨなりてゆく水海とて之也。今小塩シホなるぬ海ウミ尤モトありん。瀬田セタより貝津イヅとあり小二十里。東あつて廣とて平凡ヘイ九里。今津と依和ヨヘとの間最廣モト一。小乃淡ニいぬの貝津。中ハ大浦。東ハ塩津也。小乃心と隔ヘと越前小隣也。此湖の形琵琶也。似とニ似と。望田カクより小十七里ハ亦亦廣く。琵琶の腹小似たり。望田より勢田とて四里ハ東西狭セ一。一里の内介あり。琵琶也。麻首あり。ぐくく狭一。勢田より望田とて一里。琵琶の海老尾エビ也。竹生嶋と名ふ。比とて之也。作と琵琶湖と名ふとて之也。

竹生嶋縁起云湖水と云琵琶湖

者竹生嶋乃天女。音楽と好コ好ミ不故海と名琵琶湖。神と云妙音天女。已上文畧。近江国ハ田村小塩と云。白雲のありし時より。伊勢相伝イセ云。少の孫のわさうかのこころのつらん。突ツ沈シ云。時志トシぬふとハ。最士の界也。又丹海日と云。此亦ふらり。最士の心。美名と時志ぬふと云。又小部コベの最士と云。いひえいしと云。

伊物集註云也石心より叡心と見え、駿河公小
て石心と見るふ心のとうとういりり不なりし

管見記云永享五年十一月廿日叡山之雪裁可謂

都富土者也入夜聊風氣之間不離炉边上下畧

峯峯之記云藤原植通冬のつりりて比叡心乃銘日

の銘小殊小は耳へくひりりる小共余りとては

いりりひりりもさしとてそんして

へ所つりり冬のはれさりり冬初の爰土の嶽のあけの

内侍所土音和歌「時ちぬも根も今やかきむらぬのやハ冬も抄を日昨大納

▲さくさく屋流不流と

▲北良の流ありし吹とても 北良心ハ堅八町と云

七る心のつ也心取不無樹くさくさくのとてりり然

とあり系よりふ玉へりり十二里と蘇の海の

汀又白髪明林はたこ 孫とありしとてん

孫ありしとの字と畧して孫ありしと云

家よりり乃吹ありしとてりり又孫とてりり

家○名物北良の孫ありしとてりり流路をけりるの翅空

▲緑樹陰沈々奥木小登りる気色あり月海上ふ浮て

ハ鬼も浪をさる 自休藏主詣竹生嶋作詩緑樹

影沉奥上木清波月落鬼奔浪灵灯灵地無今古不

断神風湫度舟兵 自休藏主ハ建長寺の廣徳菴

乃信元ハ奥州志信の人と

竹生嶋

六

まゝ今案 獅子通王佛未考 佛名經より獅子
神通幽王佛とあり。遊る可考

帝殿まゝり小鳴動一々 弁天経曰尔時宇賀

神王及十五童子各説此咒已大地六及震動天雨

七珍万宝

日月光暉て 同経曰正生身躰居日輪中照四列圍

其時虚空小音樂空々 取勝王経曰好音樂故名妙音

ちりり流生洩及乃ちりり

弁天経曰化度一切衆生令入佛道令得安穩

又ハ下界乃龍神と成と 同経曰冠中有白蛇

其蛇面如老人 中畧復此神王身如白蛇

忠度

桓武天皇十一代後胤備前守刑部卿平忠盛六男正四

位下薩摩守忠度ハ一若のゑ乃手の大ぬまかり

りり。是部六孫を討取之 行年四十一歳 平家物語

畧 壽永三年二月七日一若を 範頼義経の軍中よ

かしく討取同 十三日忠交其外平氏の首共と持向

八条河原 曝之 東鑑文畧 平家物語云一門の人々を

と焼きたる様おひくく之のありと云く各所をひや

して落し中か忠交ハ 淀の河尻と云りりりり

より高第六騎お具し。去のひてお小忠 疾ま小五条

之位の終小あり。一門の景花つききて。おゆりりり

忠度

世あつたりて勅撰の以汝法何んよ方の八重の波
路よ洗むた。後世さても朽ぬ形見を傳りりゆきと
あひ出—登りよ。年比の愚依波の下のこくげとさ
んよ。遺恨よとて檻の引合より。事物一忠をぬき—位
へ遣—流への洞を流して細めく。件の中おの仲に
さうぬくよ。あいくらも有なれども。其方勅撰の人
されば。名字をいあくつさねど。古に、花と云歌よ
せんるよ。一さぞ。後人あかしくなれらる。盛義記同之

「さう流やまの流い河さかどきなるのこぼるる
忠度百首世方の河さよたぬるよ。合よ古のせとて
世、お千載集まよ。とよ後人あかしく。河さよ古乃
あし—つらんとよ。ゆらるる。八雲、御抄云千載平
家依勅撰者不書名。長門本平家物語云恐

意

「いふせん宮本がよ。摘芥の糸のこまはたある人のあひ
千載集よ。流の旁に。世、おと二さぞとよ。人あし
つ—きとり支畧。今案い—せんの旁千載集意。一は歌
あか—人あかしく入ら。又—あひさうるよ。つむせりのと
も。長門本よ。名本があしあるい。古字のあまより成—し。
ふ載集よ。流の旁一そ入らとあひ。世、おと二さ
つ—まらゆ—あひ—

▲花とく—と捨ら別の月よもきこい—

花と雲とをらふるをての月と雲のくもいり
と云ふ。世捨人の心もなす

新子。思ふもさなりと云く秋の夜の月をいりて
後醍醐

▲後成の奥小記を。仍肺の屋流は流を

▲城の離宮よかりむと

或云白河天皇應徳三年修宮於鳥羽殿号城南離宮
王城のありて建つる小城の離宮と云り。後醍醐の
醍醐の作付と宮殿の名ありて其後絶つ。今と
鳥羽村のありて路の東に有小忌忌。離宮庭中の假
山号秋山者也

文選長門賦日期城南之離宮海注曰離宮謂天子
行处別署呂向注曰離宮天子出游之宮也

▲都と流つる山崎や。山崎ハ山城ハ川源也

。大なる山城は流く山崎と云ふ。思ふ所あり。如能
関戸の名ハ名のきく。山崎のありあり。若し此所

有官舎号関戸院後世指其曰跡名関戸宿。世傳
昔此所置国戒非常云。又有関明神社関戸ハ山
城其津兩國之堺也

▲浮舟のりも更の塵の浮世の芥川

塵の浮世とい色多香味觸法の六塵。或ハ中流を指く
と云。芥川の楳岬嶋と都。小よりも人流と云ふ
と云。延英式ハ河久カ神社と載る也

。唐^{唐王}の世のまやうけても儲りあるものほひなるに

▲松名の小篠と分てて 松名野小篠は松名川を越て

松名寺村の山より。伊丹^{イタミ}より北西辰巳小なるを。古

より小松名の端に松名の紫山松名の中なるあり。

^新あるうらうらの小笹赤ひさ志の小吹く秋の夕風

松名野にちかすも多くあるうらうら松名野につけり。

あるうらうらなるのこころえ蓮の秋さましく

奥義抄云雄略天皇かの野あく狩し松名川に

さかのまよとひより取く。松^新なるうらうらに。松名を

て松なるを松とてさく。兼邦石を抄云と古本

のかわりまの那の内度とてあり。あふりよまを田代

とありはひむ。松とてさく。松名は大松と松と

毎日小待うらうら。松名川の二つもうらうらと

ゆき。麻王とてりゆき。麻王といふ松名のこと。松名

あるうらうらにゆき。松とてさく。松名川に

いのあつらうらとてりゆき。松名川に

井とて。松名川を松名川の川にゆき。松名川に

▲月も高つら松名川の底深くともなる

松名川と小松名なる。月も高つらとてりゆき。松名

の比に松名川を越て。松名川より少なり。大田の松名川

あり。松名川の少く。或は大松名。松名川に

あり。有馬温泉寺に記よるなり。

新後拾

○八月五日小世うるをては後せいはる世ふつくことその比

▲芦の葉分の風乃も

○拾夏法のまえりやよく新波沼芦の葉分よさら浦比

▲とつらふもとも有馬山 有馬山ハ撰及有馬郡之温泉ハ

在_二山_一庄_二 或云風去紀云有馬郡有_二恒原山_一山_二間_一有_二地

湯_一因_二以_一為_二第_一兵 欽明天皇三年温泉路_一出_二同_一九月

帝行幸_一後_二孝_一法亦_一以_二幸_一 シテラ 日本記文畧

○千新しきももことことの林うらんあり一有るのむ感_一 賢賢

▲千山よ之痛林社ありんよわくしあり

▲うしろ柳の葉をよき新波の比よ有尾沼

新波寺の傍也。新波寺ハ天王寺と云く。名士を説よ

流も、有尾ハ撰及武庫郡也。

▲ころこまよ、ツツ葉のよむをいね比よ流も、われ衣の鞆よ流も。

▲志いさくふ馬 志いら教のまこ急平よ流も

▲千此須磨乃浦とPいさひ一さあよそ名とら

須磨の浦ハ撰及矣田部郡也。想て次_一戸_一いさひと評よ

かもの河も多くつらる也。 或云ままの二まよまひ

一いさふもさり、まの俗よ素_一肌_一足_一な_一く云ん秋_一其

同也。或ハ和の法をままと云。むう一より須磨の浦ハ和

さひ一さあなる故よままといつらるへ一。 採いさる流

▲つらつら小同人あつらひまの浦小藤屋とれつづつとまよ

中納言助平のちん、毒一くね風小流也

忠長

五

和歌也ふふ藤垣まといあかやうんとて。海小乃よいひ
らら藤ら川とくさあ川めそ目小川と。なれとらとと。
藤垣まといとくといとく

▲又此とまの心法よ一本の桜のひきあ人のまの心のあーの
ゆく 或人とい薩摩守忠友と指くまて。た交塚の在矢
田部那駒之林村西丁町許云庫より二十町斗ぬと塚の
とよ大木のねと柱より。高村よ各木のぬあり林二もふ松
。此のふ乃約ち林ふとてまのたふもいさかひとさうら
葉より小此法よ振とまの心のあーのまとい。花や今
育のありあうまうとくさあをまといとて。めくゆくと
ゆくと

▲是引の心 橋垣よ流と

▲あくとい此心續りてまうまうとく。さんひまの此浦の海とまとい
此浦の橋や海士ふれた。橋はらるる小此まかま人のいよ人た
まう。 岷江不楚云 ヤカツ 山吹 日 山勝 日 山下人と云。
徳因が松云山里小柄とみまが川とみまが川

▲乃てわかりれ里離まの ね比よ流と

▲とそ後の山里小柴とみまの心

源氏須磨云と標のつらうとまといとくさあをまといとく
あまの橋やまうとくまといとくさあをまといとくさあを
あま柴とまといのあまのあまのあまのあまの
標の遠くまといとくまといとくあまのあまのあまのあまの
まま注云

愛ハ心中なるやんまりと云々

▲須磨の若木乃搦ハ 須磨寺の門前小つり。 須磨寺

云桂一若木の搦ハのう小候りあくと云々 岷江入

楚云須磨の若木の搦ハ。 是より須磨の浦小若木乃

搦と云むと云々

○草根 取母心と云々若木の搦を若木乃つらの表乃付

▲海がーたつと云ハ 須磨寺を云々よつらと云つらの

秋風小吹ハがーを云々云々

▲引首て木乃下法と名とせハ云々今宵のつらと云々

忠度のふたハ此方ゆきの集もつらと。 東見記小此方

具足肌（金）下そ小つりと云々 平家物語云ハ此方云々

の首を云々 名とハ准ハあつらつらガ云ひつらハ云ハ

つら云々云々云々ハ。 張着花と云（金）云々云々云々

云々云々云々ハ。 薩摩守と云ハつらと云々云々。 盛長私記長内本同之

或ハ云文明の法上跡玉平井と云新ハ。 或寺の住持

若木の搦の盛りたるを云々云々ハ。 此方云々この下法と云

忠友物伝の流方を被（金）吟（金）る知（金）よ年の被（金）ふナ身（金）りてさ

も云々云々云々ハ。 蘇（金）を力（金）服（金）授（金）ゆる云々。 何方（金）より来（金）る云

々々云々小廻（金）て被（金）下（金）るハ。 唯今吟（金）物（金）小歌（金）ハ世間（金）にて

も。 和尙の言（金）ふかく。 引首てと云々の字。 流（金）と流（金）行（金）り。

某（金）が（金）下（金）るハ。 此の字流（金）りて流（金）ハ。 流（金）溜（金）りぬゆ（金）ハ（金）云々云

也と云て。 流（金）ハ（金）云々云々。 板（金）ハ忠友物伝の精（金）云

とわりのりるよ法を。其禮^レゆつる幾^クも墓と^レぬ^レるを

▲^ナ値^ナ遇^ナい盛^ナ久^ナよ^ナ流^ナを^ナ定^ナ家^ナハ^ナ家^ナハ^ナ家^ナよ^ナ流^ナを

▲夕月を^ナや^ナり^ナけ^ナり^ナか^ナの^ナお^ナの^ナり^ナな^ナら^ナふ

りけり^ナ小^ナの^ナ小^ナ孫^ナと^ナえ^ナう^ナけ^ナら^ナり^ナか^ナけ^ナり^ナ小^ナの^ナ小^ナ世^ナハ^ナお^ナの^ナ名^ナを^ナ

岡^ナ寺^ナ小^ナ流^ナを^ナけ^ナり^ナか^ナの^ナ流^ナは^ナ供^ナ者^ナよ^ナ流^ナを^ナ夕^ナ月^ナハ^ナ阿^ナ古^ナよ^ナ流^ナを

▲^ナ須^ナ磨^ナの^ナ冥^ナ夜^ナ乃^ナ流^ナ流^ナか^ナ 岡^ナ流^ナの^ナ流^ナハ^ナ堪^ナ忍^ナ矣^ナ田^ナ於^ナ於^ナ悔^ナ乃^ナ

乃^ナ在^ナよ^ナち^ナも^ナり^ナ川^ナの^ナあ^ナか^ナの^ナ方^ナよ^ナり^ナ。

●^ナ名^ナの^ナり^ナる^ナま^ナの^ナ冥^ナ夜^ナの^ナ板^ナひ^ナう^ナゆ^ナり^ナ月^ナも^ナま^ナた^ナめ^ナり^ナの^ナ定^ナ家

乃^ナ西^ナさ^ナり^ナ小^ナ云^ナ 須^ナ磨^ナ小^ナの^ナぬ^ナ下^ナの^ナう^ナま^ナい^ナあ^ナら^ナら

小^ナ是^ナと^ナ同^ナく^ナす^ナる^ナ斗^ナの^ナし^ナハ^ナな^ナり^ナま^ナた^ナふ^ナう^ナう^ナい^ナら

家^ナた^ナ乃^ナ相^ナも^ナう^ナけ^ナり^ナか^ナの^ナ志^ナと^ナう^ナら^ナう^ナら^ナう^ナ。竹^ナの^ナか

こ^ナの^ナり^ナ一^ナ少^ナけ^ナ小^ナの^ナも^ナ彼^ナむ^ナり^ナの^ナこ^ナう^ナ一^ナの^ナさ

よ^ナお^ナり^ナひ^ナも^ナく^ナら^ナま^ナら^ナり^ナ。こ^ナを^ナ冥^ナ夜^ナの^ナ流^ナと^ナ斗^ナと^ナこ^ナの

流^ナの^ナあ^ナま^ナら^ナう^ナこ^ナを^ナく^ナよ^ナり^ナ。ま^ナい^ナく^ナも^ナろ^ナん^ナも^ナら^ナう^ナこ^ナを

▲ま^ナよ^ナふ^ナ夜^ナの^ナ相^ナ流^ナす^ナん^ナ乃^ナ魂^ナ魄^ナよ^ナう^ナつ^ナり^ナあ^ナり^ナて^ナあ^ナり

魂^ナ魄^ナ小^ナと^ナふ^ナの^ナり^ナ。魂^ナ魄^ナ乃^ナと^ナひ^ナて^ナま^ナい^ナ。魂^ナ魄^ナハ^ナ三^ナ字

乃^ナ小^ナを^ナま^ナり^ナわ^ナと^ナま^ナり^ナ。冥^ナ夜^ナ三^ナ小^ナ流^ナと^ナ。

▲乃^ナ中^ナの^ナ千^ナ載^ナ集^ナの^ナ方^ナ乃^ナ亦^ナよ^ナハ^ナ入^ナれた^ナ勅^ナ勘^ナの^ナ方^ナの^ナう^ナは

さ^ナい^ナま^ナこ^ナん^ナあ^ナら^ナは^ナと^ナま^ナま^ナり^ナ。あ^ナ執^ナの^ナ中^ナの^ナ方^ナ一^ナの^ナ

中^ナく^ナと^ナい^ナる^ナま^ナい^ナわ^ナと^ナま^ナん^ナこ^ナま^ナこ^ナん^ナか^ナが^ナと^ナま^ナま^ナり^ナ。

あ^ナ執^ナの^ナ中^ナ乃^ナ亦^ナ一^ナの^ナと^ナり^ナ作^ナ意^ナん^ナは^ナら^ナう^ナ。千^ナ載^ナ集^ナ撰

定^ナの^ナ後^ナハ^ナ文^ナ流^ナの^ナ流^ナと^ナい^ナま^ナご^ナ世^ナあ^ナけ^ナり^ナあ^ナら^ナう^ナに^ナ。乃^ナよ^ナた^ナ交

勅勅の才として、さう流の才一そくても撰集に入流する
紙換るる一。よみ人かたごとくつれり。よ。世のちか
有也。秋。撰者後成の公かちつる一。ふれた子載
集以後の撰集よ。平家の人を誣言りのみ多とつれい
多、入る。是ハ清代も。年曆も。紙換るるのふれい
ともつるぬ一。勅勅とい帝王の清勅気也

字彙云勅。天子制書勅當也。増韻曰勅。勅也。無
禁秘抄云。毎風情不見。天氣閑門之外。無他。

漢人ふかしく。小。みの。ふ。む。て。貴人。或ハ賤人。佛社
示現の才。勅勅の人。本より作者乃。夫。小。志。こ。ね。し
此。ふ。ふ。又。云。帝王の清。製。或ハ遊女。の。縁。も。を。さ。さ。せ

▲
以。因。不。有。し。人。を。ま。へ。今。の。定。家。君。小。尸。ゆ。り。く。ハ。作者。を。得。て
た。び。ゆ。く。と

▲
後成のハ。え。久。元。年。小。死。去。あ。ま。ハ。壽。永。三。年。一。の。谷
よ。て。討。ま。ぬ。あ。つ。あ。ま。ハ。忠。交。う。さ。り。よ。り。二。十。余。多。以
得。小。お。ま。交。幽。吳。あ。う。り。と。ら。る。一。凡。ハ。撰。集。ハ。文字
の。勅。を。承。り。撰。定。之。の。後。奏。覽。之。物。を。と。り。人。之。を
改。め。作者。を。は。け。と。た。ひ。終。一。ハ。を。は。る。り。と。さ。り。と
け。お。お。乃。家。小。せ。れ。お。お。ハ。初。末。乃。以。倍。と。ハ。ソ。大。
と。お。と。て。ま。る。り。も。る。一。後。成。之。家。為。家。三。代。の
佳。名。り。一。お。小。為。氏。為。相。二。流。と。り。て。二。索。冷。泉

乃其家と有りしハひくは俊成のより始りし。

此、徳よ初言乃其と有りしハ誰人を指してかたはれし。

▲俊成の同村は後と、俊成の言ひ小治と

▲文武二道と受け多しと 帝範曰文武二道捨一不可也

又曰文与武殊車輪也 七書尉繚傳曰兵者以武

為植以文為種武為表文為裏能審此二者知勝敗也

雪玉 〇らそ乃此の外も心やゆらふれまを名小あらん

▲世上小眼多し 或況云目の字とぬれしあり。依と世と

よ目多しとありと改と眼多しとありとあり。

業とる小世はしりしめ歎 法苑珠林曰瀆妙

光菩薩汝為世間眼也詩人玉屑云眼高四海空每

久典 かやうの沈文もありハ眼多しとありとあり

▲柰後白河院の清きりし子載集と撰り

拾芥抄云子載集二十卷歌數千二百八十四首又

短歌在之文治三年九月廿日依後白河院宣入道

俊成卿奏之遁世者撰之准喜撰和歌式有序假名

入道俊成卿書之正曆以後歌撰之也

後白河院ハ大系ハ幸と後と

▲五條の三位俊成つうけ始りしと是を撰む

俊成卿ハ御堂関白道長公五代帥中納言俊忠男

正三位皇太后宮太夫号五條三位左京太夫顯紳

養子時云顯廣後改俊成安元二年九月廿八日六

十三而出家号釈阿元久元年甲子十一月晦日九十一歳而卒兵 雑々拾遺云三位俊成は家号を清子ヒタリとす。ふ系小位めり。依とぬ系之位と稱す。後成はの家は系極よりのも。又ふ系室所よりありたぬ。云徹チ相傳云俊成の家は五月十四日亥刻東南有火火起高辻北万里小路西北至綾小路東指巽出京極南至千五糸北右京太夫入道俊成家焼亡兵

▲二年の壽永の秋乃比都と出〜討まは

壽永二年癸卯七月廿五日平家都落く。壽永ハ

安徳天皇の二年号く。系落よは

▲心のたう蘭菊乃孤川より引返〜

孤川ミモハ下海印寺。秀明寺村の間と流きて。水雲村のありて。流川よ落る。白氏文集第一凶宅詩云

梟鳴松挂枝孤藏蘭菊兼

又應社百首。とよく小人のふ乃孤川ひわりまえけとてとて。有家

高野之記ゆ云。鳥丸資度。孤川よありぬ。家ぞ壽永の初

よ平治交朝臣。駒引返〜。和分の歌りさり。取

るつひはらとて。

一節より引返〜。ららぬの跡を尋ひてらふさつ川。三卯

▲ま〜とむむとまの浦原氏の行下る家のぬが〜と

忠實

志うさりらるるをさうらふ

須磨をよき源氏の長を

よの浦は藝居ウツキヨ一はつり。後く源氏の長をいさへ源
氏の長を源氏の武士ふらふらふり。徳のふらふらふら
浦の源氏の長の子をよき家のおふらふらふらふら
らとらんでくあふらふらふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら
源氏長をよの浦は藝居のふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら

▲志願小一乃谷の合戦 一の谷合戦は平家相討はあつり

畧之一谷の在り、抄み矣田部、郡西須磨村、谷の長さは
四余、横二十間、高さ十二間、法十七石、谷はより浪打
際と六十間余、二の谷はよりの間、二町に十間余を流す
險阻の地、世に逆落サカサマと稱す。二谷同前、後
は、谷の長さは四余、横八間、高さ九間、谷はより浪
打際と四十間余、この谷はよりの間、二町余を流す、
三、谷同前、後く、谷の長さは二町余、横九間、高さ九
間、谷はより浪打際と六十間余、後く、二町余の間、
つり、東と一と定て二とあり、お並なみびより。

盛衰記云、一、谷と云ふは、後セカ一と奥廣ウラヒ一、あは巨
海ウミ浸シ々々して波ヒナ繁ヒレく、小い浦ウラ山ヤマ幾カ々々して岩イハ多タし。
屢シバシバ風と立ちく、あはれい、人をも通る人をも折る、依
小田コノとヒキあヒキ城シロ墾クサ也カと

▲武蔵の役人小豆部の六浦志願

忠實

忠澄ハ大職冠後胤藤為憲七代岡部権守泰綱長
男也武藏七黨の中猪役黨乃侍也。保元平治の時
より名の大。武蔵本庄と依るの岡小島移り
る。六流をが四家あり。駿河の是歌よ六流をうを
りりと云へ虚説く。盛衰記云六流を忠度と結
り其恩賞よ薩摩守の如きの庄園かケ不と
賜るこくく 武蔵國の雲田川よ流と

▲手鑑 龜年よ流と

▲心鑑とくく 盛長私記よ龜年 龜年と云

▲元明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨

觀無量壽經曰無量壽佛有八万四千相一々相各
有八万四千隨形好一々好得有八万四千光明一
々光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨 選擇
集云弥陀光明不照餘行者唯攝取念佛行者之文也
▲あまのくみ女師花長月の如き花師の如きは流と

▲あまのくみ女師花長月の如き花師の如きは流と

○神皇正統記云あまのくみ女師の如きは流と云
▲あまのくみ女師花長月の如き花師の如きは流と

松原抄云公達者三家等華族也。三家者中院困院

職原抄云公達者三家等華族也。三家者中院困院
花山院。此外大炊御門流以三流為花族公達也。又
云凡公達諸大夫号起於執柄。執柄一門及可然人々子

孫謂之公達ト又云有生公達注云生公達者非三家
事三家流末也凡雖三家之末流代々經中將之家
者可為生公達家也。是曰生公達家者三家者代々
至公卿或至太政大臣又生公達者雖至中將參議
數代不至納言以上家也矣

▲箠ヒキとヒキれハりキるニ經冊トとヒけラれハり

平家物語云箠小ひ付るハぬクるニ是レトキ。盛衰
記云一巻の巻物ト。披ヒきハれハぬクるニ。披ヒきハれハぬクるニ。

とキ外盛長私記。長門本等ハも。經尺の沙汰ト。

箠ヒキハ字書曰音眼盛弓矢蓋也以獸皮為之。周礼司

弓矢曰中秋獻矢箠。弓道私記ハ箠ハ披ヒきハれハぬクるニ。

花ハ藤ハ角ハ轉ハ紫ハ箠ハ柳ハ箠ハ忠ハ度ハ短ハ尺ハ箠ハ等ハ也ハ。

とキりノ畧ト之ハ經尺ハ箠ハ深ハあるトとキ。

經尺の事。或抄云公方普光院義教公。富士ハ院人

の次ハ不破ハのハてハ一ハ箇ハ月ハ之ハりト。

とキみハぬクるニ。世ハ不破ハのハてハ一ハ箇ハ月ハ之ハりト。

とキみハぬクるニ。初ハるハとキみハぬクるニ。

とキみハぬクるニ。今ハ葉ハとキみハぬクるニ。

とキみハぬクるニ。長ハ記ハとキみハぬクるニ。

とキみハぬクるニ。女ハ中ハとキみハぬクるニ。

とキみハぬクるニ。長ハ一ハ尺ハ二ハ寸ハ。

とキみハぬクるニ。長ハ一ハ尺ハ二ハ寸ハ二分ハ。

及流より幅一寸八分。長一尺一寸五分。但し平人用之。清
和と平人志討の。幅一寸。長一尺八分と云。家々よりよく
そしお習らゆ。若しゆきと経尺とあり也。赤墨の紙の
後花園流の時より始りし。

▲花の根よゆりあり

古詩云花散在根鳥帰古巢矣

清原滋藤詩云花悔帰根無益悔鳥期入谷定延期

○花の根よゆりありはるふゆりありまよ乃り糸とありんか

崇徳

兼平

安寧^{ニヤ}天皇後胤木曾^{キナ}仲三兼^{ニヤ}遠四男今井四郎兼平
者木曾義仲^{ニヤ}乳父子也。ゆりよ兼平武勇人。傍色
忠功化よ。美らあり。義仲兼平と起し。小陸乃へ出
陈の初め一歳よ兼平ふ益と云と。今井頂戴し。
若し出世おおく。兄樋に次高兼光と執持ふ
る。トさる。若し兼平の時の
い。とさる。一歳よ伏やさんとりふ。そは法
方の合戦。兼平もあせとせし。とさる。壽永
二年正月粟津の合戦。兼平も義仲討を強て
きて。兼平た刀のさし。とさる。とく。つ。る。り

兼平

さうさきまよふたつぬうつて死しきり。

平家物語及
盛衰記文畧

△始く後と信法流や本為のり忠を以て

本為義仲の義弟の跡とあるなり。義仲の本為不

流と信濃国八国造本紀云科野国造瑞籬朝御

世神八井耳命孫建五百建命定賜国造

類聚国史云天平三年三月以諏方国并信濃国

大和本紀云信濃国八本の中は級と云ふを彼本

の皮の極と云ふ。字も此級の級の皮務と云

白と云ふ。是を彼用務言は得装束也。級と云ふ

有二義一級二白此二義と云合て謂信濃白の字

志本と別記日本紀云白豹と云。信法とい假字
云こころ

△是ハ本為の心家より出たり信あり

本為の心家ハ信及安曇也 續日本紀云四

十二代文武天皇大宝二年九月壬寅始開美濃国

岐嶺山道矣 盛長私記云本為と云所の究竟乃

城郭也東ハと野共藏相操と通く奥廣く有ハ

英法と境乃一と一と窄し。行程二日の深

山也。磔殺千了跡を以て責居ると云極なり。

本為安小居く謀叛と巧む。系於小宮

々是ハ平家大と跡を以て本曾ハ信法と云ふも

兼平

あるの端、形をそとよとよし。武衛未、雜伏さうり
延小割へ小国輝、如何せんとして下騒さうり
畧

江州粟津が原 三井寺よほと

信法流や本るのうけ橋名ありねふ
うけ橋のあげねと云富より編流の宿へ勢るる
よりり。則掛橋と云里を本る川小掛する橋
よの根と云のよの乃池より小掛する橋と云の
方本る川のよの。横二る長と十間あり板橋
と。柵于あり。昔の信法流あふのる煥祖か
て通流よりり。此時始よりうけ橋を掛く。
通流出来るより。續日本紀元明天皇紀よりり

一書云推古天皇二十年百濟国来人中畧

巧懸長橋遣干諸国懸三河八脛長橋水内曲橋木
襲梯橋遠江濱名橋會津間川橋兜岩猿橋等百八
十橋往還通路無兵

後拾分書とよのうけ橋たえより末深とよの白名

名ありねふ 江州粟津を

是の山田矢橋の後一舟よりくもる

山田矢橋の二所ありけとも末迫江と粟津の
白こお出より系船して後色い山田の海よりら
り。矢橋の後いふ十町斗と。あふのる十町と
親長記と矢馳と云。新撰舟枕よの矢波瀬八橋

と云 太平記廿一巻云或ハ後々々々湖と云山田
矢早瀬の後一舟の棹さると人も有り云々

▲世の業のうきと云ふつじ業亦やたぬえいり

此方の有りいこふんらと云ふ人素考

▲出家のゆき云ハ 維摩詰經曰夫出家者為無

為法無為法中無利無功德矣 又曰堯阿耨多羅

三藐三菩提心是即出家矣 瑜伽論云在家煩撓

若居塵宇出家閑曠猶如虛空是故應捨一切於善

說毘奈耶中正信捨家趣於非家矣

▲笑淨經云如後得船 法華藥王品曰如子得母

如後得船如病得医如闇得灯 上下畧

▲近江の海 竹生治よほと

▲又る棹の又るさぬ人うれと 水馴棹と云 近

材集云又るさうかいあり馴るさう

拾 大井の次後のと云棹又るさぬ人もありりり

▲私といつて悔むと云くくはさゆ

とくくはさゆといつくと舟のりゆと云

傳燈錄曰達磨遙觀此土有大衆根器遂泛海得々

而來單傳心印矣 五代史云僧貫休入蜀上王建

詩曰一瓶一鉢垂々老万水千山得々休矣

東坡集十四云知是多情得々來矣

▲比叡山 江列志賀郡也本朝七高山の其一而諸

山の司也。此山ハ限峯東方近江国西方山城国也。
 下学集云初曰日枝山朝日出此山而漸昇其枝故
 云日枝山後改曰比叡山山門日記云此山镇護国
 家道場天子本命靈城故以此山比叡聖之在双而
 云比叡山又云桓武帝与傳教大師比同叡念建立
 台宗故名比叡山矣。帝都記云平安帝都ハ天との
 名跡と云々ソセリ云々良ノありて日得と云々
 月之跡乃此光と云々其の光と云々其の光と
 法林是と云々月と云々其の光と云々其の光と
 山ノ名付と云々其の光と云々其の光と
 〇世中ふてふと云々其の光と云々其の光と

山三十一社

旧記云日吉神号者傳教於小比叡
 峯見三光日輪現教迦藥師弥陀像教問其名神告
 曰堅三點加横一點横三點添堅一點言已其光昇
 空而去教於文字見之堅三點横一點為山字横三
 點堅一點為王字高大不動者山也経緯三才者王
 也由是遂崇号曰山王矣。日吉神託曰我名山王
 表三諦即一也山字堅三畫者空假中也横一畫者
 即一也王字横三畫者三諦也堅一畫又一也二字
 三畫而有一貫之象故我立為号也一心三觀一念
 三千亦後如是是以我護持台教鎮守護国家下略
 日吉社在淡海国志賀郡所祭之神七座是神集攝屬社十四座

藤井

大宮 大己貴命 日吉鎮座記云人皇三十九代天智帝

御宇白鳳二年三月三日琴御館奉祭山麓其後

御館乞奉拜尊神御形于時夜忽光曜如日其中

有文字更互異物依之奉称大宮也 文畧

二宮 国常立尊 神皇魂尊 同記云此即天地二儀主神天地始其

中間出現之故名二宮二字此天字畧也天地陰

陽兩儀加護神者是也無跡始自神代己来波母

山降現也矣

聖真子 正哉吾勝尊 同記云聖者神也言出生兩神真

心中故名矣 天武帝白鳳年中影向矣

八王子 国狹土尊 同記云八十萬神太祖元氣神也

崇崇神天皇即位元年鎮座 矣

客人 伊奘册尊 同記云文德帝天安二年六月十八

日迁宮矣

十禪師 瓊々杵尊 同記云十者天七地三之數禪讓也

師国也言十善天子讓国之義矣 桓武帝延曆二

年正月十六日影向矣

三宮 惶根尊一說云 天照大神三女 同記云三女影向故名三宮日本

紀云天神第六惶根尊是也延曆三年陽春中比

御臨幸矣 己上本宮七社也從是攝属十四座

之次第

下八王子宮 天所中主尊 鎮座記云祭礼七社外當社

右有神馬也東有石名石船明神初降之地矣

王子宮建武名方命 同記云自信州詔方郡鎮座矣

早尾素戔嗚尊一說 同記云馬場頂上鎮座也諸人加

護深重神之故坂口祭之矣

大行事高皇產靈尊 同記云昔日神入磐戶閉居之

時以此神之謀而集八百万神奏神樂日神再御

怒解矣

聖女下照姬 同記云延喜年中祭之矣

新行事瀧津姬 同記云天照大神与素戔嗚尊盟而所

生三女神之一也矣

牛尊同記云八王子右祭之此殿底有靈石丸

口傳矣

小神師疾火々出見尊 同記云地神身四尊也矣

惡王子口傳 同記云童子形出現矣

岩滝踏翰姬命 同記云竹生嶋神同躰也神武

帝后也矣

劔宮素戔嗚尊 同記云童形出現也叡嶺凶事

退散神也矣

氣比仲哀帝 同記云從越前国角鹿郡影向

桓武御宇勸請之矣

大竈澳津疾命 同記云此即大歲神子也大歲

者杵築大神御孫也諸家竈神是也矣

兼平

竈殿 澳津姫

右、撰属十四社加上、座称廿一社。

▲^三八王子と小記と二宮のとのふ
後、宮とお並ひたり。藤より社と八町斗。又神社

宣令曰八子同天降故曰八王子、其本比、千手観音

▲戸津坂平の人家と 坂平の叡山の東あるなり。初

坂平小の初、神明神より、まこと、三升ちの法とこ。

東坂平よい山王権現より、まこと、安あふ、戸津坂

平の東坂平と。或云坂平小三津、淡あり。所謂戸

津今津志津也。一説志賀津、大津、栗津、是と

と、淡たると

▲^中くの夏夫我といふ城の鬼門とちり、西魔と拂ふの

うくと 丑寅と鬼門キモニと称する、陰陽鬼律集云

とちり不ちり、故に皆人あを、まことちり、と軟

。家といふ、乃じと、鬼ぬる、とあくと、とと

韻府云交趾有鬼門關多瘴諺曰若度鬼門關十去

九不還兵 神異經曰東北方有鬼星石室屋三百

戸而共所石傍題曰鬼門門晝日不閉至暮則有人

語有火青色兵 海水經曰東海中有山名度索上

大桃樹鹿枝名鬼門萬鬼所聚兵 事文類聚云東

海度朔山有桃樹蟠屈三千里其早枋向東北曰鬼

門万鬼出入也、有二神一曰神荼一曰鬱壘主閻領

衆鬼之出入者執以飼虎於是黃帝法而象之因立
桃板於門戶上畫神荼鬱壘以禦凶鬼此則桃板之
制也蓋其起自黃帝故今世畫神像板上其下畫龙
神荼右鬱壘以元日置之門戶也

△佛象の象といふは佛の象の象といふことなり

一仏象の象といふ比叡と云ふこと。統の象といふ大坐
具象と云ふこと。蓋日竜神の象といふこと。凡仏法は小象
大象とてその象の深淺を以て象と云ふ。凡仏法は小象
の成仏得脱と云ふ要といひろめ象と云ふ比叡と云ふ
一仏象の象といふこと。法象と云ふ一仏象と云ふこと

戒度閣持記云衆者以運載為義究竟不二名一即

佛衆矣 憬興云一衆者即智雖有三衆其極無二
故云一衆矣

又天名といふ号といふ震且の比明の洞と云ふ
比叡と云ふこと。但此は唐土天名といふ比明といふ
一洞のやうな他といふものありて明といふ天名
といふ所のやうな隣といふものありて明といふ天名
名の窓といふ日月の光も因に入らざるやうに
明といふやうな名に明の洞といふこと

大明一統志曰浙江寧波四明山在府城西南一百
五十里周迴八百里踏紹興台列之境二百八十峯

其巔五峯絶高形如芙蓉陸龜蒙云山有峰最高四穴在峰上每天色晴露望之如戶牖相倚矣
福地記云上有四門通日月星辰之光故曰四明矣
云々云々日竜神小治と震且八百方小祀と
世傳天竺の天竺山五合峯の世寅唐土の天竺
山長安城の世寅唐土の世寅
と法琳法琳の記と方与勝後及一統志と
又長安城の天竺縣より教百里云々西北小
あふん此後お遠く

傳教大師桓武天皇と仰をひらひて延暦年中の

本中堂号北江山寺後号一乘止觀院矣
帝王編年記云延暦七年戊辰傳教大師建立根本

中堂号止觀院造藥師像同十三年甲戌九月三日
壬午供養根本中堂天皇御願檀主最澄禪師大導
師善殊僧正伊呂波字類抄云延暦十三年造
之元号北叡山寺而平城御宇改延暦寺矣
此山昔ハ云々坊今ハ百二十ハ坊云々ハ十石を

七多小再真也 帝王編年記云五十代桓武天

皇諱山部 柏原帝 光仁天皇長子母曰皇大夫人高野新笠

康平

贈正一位^{イサノミコ}乙繼朝臣^{イサノミコ}女也。天平九年丁丑誕生。室龜
四年癸丑立太子。年三十七。天應元年辛酉四月三
日受禪。同光五日即位于大極殿。御年四十六。御宇
二十四年。自延曆元年壬戌至同光四年乙酉。都平
城宮^ニ云木同元年三月十七日崩。四月七日奉葬
山城國柏原陵^ニ矣。

傳教大師。号寂澄。俗姓三津氏。江州滋賀郡人也。其
先祖後漢獻帝末孫也。日本應神帝。所号小乘初
くは及滋賀の地小居候と。も子孫百校と云人
支婦子多と云と。いひく法師小行移と云
寂多也と云と。と。事忽々懐胎と。于時神護景

聖元年^{丁未}八月十八日最澄誕生。弘仁十二年
六月廿日遷化。年五十六歲。^{已上今昔物語及和歌書文畧}

帝王編年記云延曆二十四年。天應二年八月十九
日改元依即位也。續日本紀云桓武天皇詔曰

殷周以前未有年号。至于漢武始稱建元。自茲厥後
歷代因循。是以繼體之君受禪。之主莫不登祚。開元
錫瑞。改号朕以寡德。纂養洪基。託于王公之上。君臨
寰宇。既經歲月。未施新号。今者宗社降靈。幽顯介福。
年穀豐稔。徵祥仍臻。思与万国嘉此。休祚。改天應
二年。曰延曆元年矣。

▲我立極く休一^{ハシ}ハ
兼平

新古今集 秘老及傳授大師の考ふ

阿耨多羅三藐三菩提の仏より松ふ冥加の世に
河之云比叡山中堂建之の時より

東野列之阿耨多羅三藐三菩提の仏といふ云と正偏
智の務きよりその仏の位と尸といふべしと
系立松とい比叡と又材木と云と松ならん今
わく松と云中堂と建之と云天下を平二世
安永の初秋の乃地といふと終ふると云と云
正しくありと云法の仏よりちりりなり
乃くふると云此考よりいふいと云と系立松と云

弥陀經義疏曰阿耨多羅云此翻在上三藐云曰正
等三菩提云曰正覺即佛果号也

根本中堂 止観院也 河海抄云延暦七年傳教大

師建立之本尊藥師如来御長五尺五寸大師造立
之其以後梵天帝尺四天王忠仁公日光月光菩薩
宇治関白十二神将御堂関白被造副之

釈書智證傳云初傳教於叡山構三字北置多門天
王像号毘沙門護世堂南度經律論名一切經藏中
安藥師像曰一条止観院以其居中称中堂又稍朽
壞珍合三字為一堂

天宮の所在所波止土濃 大宮権現所と波止土

兼平

法と号を大宮権現ハ上ノ記と。

太平記十八云此波忽ト一葉の葦乃海中ノ浮ヘル
少々為リ不レ々リ也。葦の葉果ト一ノ流ル。

今比睿山の麓大宮権現無跡ト此波止土流ク是
故小波止ト土濃也トハチ成ヘ一ト云々
毒ク白ク鬚ト云々

。ちりとのせとの板橋石橋おつてきて登るふりこころ 経部成仲

新撰譚枕玄柝傳教大師殿と建立を修して

修シても我山のち後社トハツり色の社ト云々

修シと云々リガ。ゆらつおがリ一石ノん。比社トニ代

の社ト云々の社トとあり一つ。彼社ト云々リと

修シと云々リで修ムよトの社ト云々トはレ修シと云々

我朝トハチあり一の社ト云々トはレ修シと云々リ其

修シと云々リ小比叡の社ト云々トやうトの社ト唐湯ノ一トは

の社ト云々リて修シと云々トの社ト云々トの社ト云々ト

と云々ト云々トを修シて一社ト云々トと云々ト云々ト

東坂ト云々の川トと波止土流ト云々ト云々ト云々ト

時トニ云地ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト

ゆらト云々トと云々ト一社ト云々トを修シと云々ト

と云々ト。

「我山とちの社のあつて山いえの板やと物のいふ

▲有難や一切荒生悉有仏性如來と云々のいふありた

兼平

三

釈ししつれり 是の涅槃經の文に委く白
くはあり一切衆生よ悉有仏性と云ふ文に我
か多とも釈ししつれりといふ

▲佛衆生通より多し 惠心云應念一切衆生悉
有佛性 兵 白樂天云寒冬天水結成青陽春溽水
成水氷水不二也佛衆生豈二法 兵

▲佛衆の衆よ遮那の稍と云ふ
遮那者廣訶毘盧遮那也大日如來也

轉行曰毘盧遮那此云徧一切処煩惱體淨衆德志
備身土稱徧一切処 兵 傳教慈覺入唐一く大日
曼五の之密の觀法と云ひ傳て此のふひろめ

▲蘇小止觀の海と云ふ 湖水漫々と云ふの蘇小
と云ふと止觀の海と云ふ 止觀といふ此の蘇小

つる如の云々 止觀者梵語奢摩他翻云止
又毘婆舍那記云觀梵語憂畢又翻云止觀平等

止觀曰法性寂然名止寂而常照名觀 兵
弘決曰還源及本法界俱寂是名止法界同朗咸皆
大明名之為觀 兵

止觀とい其教甚深廣大なりが蘇小海と云ふ
又戒定惠の之學と云ふと云ふと云ふ
戒定惠者三藏法數曰如來立教其法有三一曰戒

律二曰禪定三曰智慧然非戒每以生定非定每以生惠三法相資一不可缺而皆稱為學矣

安法師云斯之三者至道之由戶泥洹之開要戒乃斷三惡之干將也禪乃絕分散之利器也慧乃除藥病之妙醫也今謂防非止惡曰戒息慮靜緣曰定破惑證真曰惠矣

之塔之東塔西塔橫川ととこ東塔ハ止観院と
記と西塔ハ空幢院と多る釈迦横川の楞嚴院
存る你陀観音也此之塔ハ多る十六夜の
此之塔と之塔の之乃蒙小配ありてあり
入の又一念との機の機と入一の人の流徒と也

此觀ハ一念之千の観の之と昔此ハ小之ハ
坊のりハ小之ハ對してありてあり。鑑真

台宗章疏小安三千之徒とありも是ハのハ
一念三千者止観五曰夫一心具十法界一法界又
具十法界百法界一界具三十種世間百法界即具
三千種世間此三千在一念心若在一心而已介尔有
心即具三千亦不言一念在前一切法在後亦不言
一切法在前一心在後例如八相遷物物在相前物
不被遷相在物後亦不被遷前亦不可後亦不可只
物論相遷只相遷論物今心亦如是若從一心生一
切法者此則是縱若心一時含一切法者此則是橫

兼平
五

善平
縦亦不可横亦不可只心是一切法一切法是心故
非縦非横非一非異玄妙深絶非識所識非言所言
所以称为不可思議境意在於此矣

梭といふものごとく織具と。梭より多々の
綾羅綿繡を織あをりこしく人の梭より多々の
るものとあひひつとを梭とせし
列子天瑞篇曰万

物皆出干機入干機矣 傳燈録曰人百歳不善諸
佛機未若生一日而得之矣

▲圓融の法も圓融といふ法と。心は心は
也。融ハ融通也華嚴經曰顯現自在力為説圓滿經
叙籤一日始自華嚴終至般若雖多不同但為次第矣

三諦所攝今經會實方曰圓融矣

▲月の横川もみくころや 横川は山の内こなまよ
り十八所のりれ横川楞嚴院に堂ある向より
横川といふ川なり

▲さくばやまう幸法のはりね 三井寺に法を

▲七社の神輿の神々の稍あへり 日吉七社はと山紀を
神々の日吉の神々をさへり。卯月中の甲の月也。

此日七社の神輿唐崎よあいて祭の神供をさへり。
日吉鎮座記祭儀式云卯月祭礼者琴御館以大賢
木養神幸之祝詞於唐崎如先盟恒世裔奉粟御料
也出御輿而祭者桓武帝延暦十年又御舟祭始延

文年中洪水已後例也イサト矣

傳抄・おろろえさやふ照しよはれむ日吉の七の陣イサト 後村上死

▲昔なるくのふ橋の忠交山後と

▲紫糸の志つくも 説文曰屢數也イサト矣

孟律杖之志つく細くこころく。菓子杖之志

く杖の志を志けさるこころく 志杖之志

志げさる志つくこころく。志杖之志

志杖之志と云。又舟之志二艘と云く志杖

志杖之志と云。おろろこころくこころく

志杖之志。人の目やこころく志杖之志

志杖之志と云。此志杖之志と云く志杖之志

志杖之志と云。志杖之志と云く志杖之志

▲修羅甲曹武士、矢、屋嶋、漁夫、羽衣、記ス。

彼岸、東岸居士小波と。

▲有ウ為キ生死のちまこ、舟をさる舟老かひて、お後不同身、幻

池新の志と云ん。是れ令別經の文と云けり、志杖

▲種キ花ク一日の業キの朝顔キは、浪と、弓馬の家、安室、浪と

▲僅ワ、少カる志の七キ騎キと、おろろ、本島、浪、此、浪、下、浪

盛衰記云、去、身、六月、小陸、舟、を、登ノ、一、小、い、お、方、余

騎キと、お、ろ、ろ、一、小、今、也、ま、川、系、を、お、ろ、ろ、一、只、七

騎キは、不、過、り、り、巴トと、云、女、を、此、七、騎、の、四、也、栗、林

の、軍、乃、折、り、よ、い、志、後、二、騎、は、成、り、り、り、文、畧

兼平

長門が巴の意をか娘と多き妹と。生年十八歳。同之。後之以下多き家物借と云くつけたり

▲多き子淵田より多りひひく又之百餘騎小多りぬ。範頼ハ勢多の橋よりん田上の貢御殿を後し。石心通り小責上。多き子百餘とて防務不
と之丸。敵大軍多きいふ所しと引也し。本
為小玉一飯終りんとあひく。之百餘とて多
終りし終小栗林の溪少くり舎ぬ。くりしこ
より入十騎二十騎馳集りては百騎小及べし
多き子安少く防矢して本多殿を小玉一飯し
めんといふ丸。終小款小責つけりて又二騎小
ぞあ小りる

盛衰記
長門本同之

▲駒のよタマ込コ のよタマ込コ 腰廻コシのよタマ込コ 自在ジヤイ
のよタマ込コ 腰廻コシのよタマ込コ のよタマ込コ のよタマ込コ
あしとひうゆりこにけりき。掛ケのよタマ込コ 胸ムネより肩カタ
よ掛ケ服クワダよ川カハあをどろと。自在ジヤイ手テ総ソウはけり

▲自害 頼政よ流を

▲此ハ睦月の末つらきまめとさうらう 冴サエ入イと

下学集云睦月正月也睦或作眠新春親類相依テ娛ユ
樂遊宴故云睦月也 矣 冴入とハ屋治小流と

▲るまのいりあやや 吳服よ流を

▲ちの月の約 江家次子云本八月十五日也依朱テ桂キ

兼下

▲一騎當千

鴉鷺記云よしく小一騎あふみの勇士のん

つういしとくしうりき

文選李少卿荅蘇武書曰

再戦一以當千矣

涅槃經曰喻如人王有大力士

其力當千更並有能降伏之者故稱此人一人當千

其後自害の手をよとてを刀をとりついでたつとて

おらてつるめいんくせふり

長門守多麻呂云日守一のうりの者とのほは不

自害とら足場やハケ玉の版原とてを刀をぬとて

さういさうとくしくるよりあふあつてぬれ

てこそ死より進むち刀のさうと二人少まどりのさう

まふあしうりき

實盛

或云實盛ハ田村將軍後胤裔を勅實直が子也

初めの名ハ河合を而を史助房と云後助房を

改めぬる一命を史実と号と云實盛は實

の養子と云ふ小松重盛は史記とあはれと云

東と和名あると云媒と云ふれ武蔵守武庫乃

別名と云ふり長井卿小松氏より

源后親房紀云昔日本武尊東夷征伐之時立置

武庫千武藏国四藤輩衛之清盛以藤実盛為武

庫別當加四藤矣或云實盛ハ母屋実房が

子守姓ハ在原氏越前守坂北郡人旧跡今在九

實盛

固本六条判官なる家家人也

盛長私記云東國の勢討らるるのあふ。実盛を棄て
と。多家の大ね維盛重衡等殺すの軍兵を討て、
坂土河を流し、討たるる別家実盛が智謀
と月ごと各遊、妻小長一殺りしかり。実盛とて
款後討小あふとて、その大乗川せも、其上と
総分忠清といひ、傷し。十余騎を引率して、多士
川とまきく、飯沼せり。干時武田を命、信玄を
相討し。款討せんとして、及半、更、多士の根方小廻、潜
よ多家の陣の後面を襲ひ、入とせり。多士、坂土河
小集り、希くるあふ、其の根も偏し、討の
あふとて、其の款の款討小寄、つらりと云、終つて
あれ、多家の大將軍と初めと。大は駿動と、佐長
信よ、多とて、素入、平長若于討り。討り者、皆敗
走と、已上、其畧
其後、実盛ハ壽永二年五月九日加
及、篠原の合戦、多家の居り、中、兵一騎、一
我、少く、之、老武者、多れ、い、なり、と、討、不、は、塚、を、命
よ、討、と、り、り、乃、年、七、十、三、歳、
加、別、江、泥、那、篠、原、と、云、少、あ、不、実、盛、が、首、は、の、比、と
て、大、さ、か、地、を、其、上、と、よ、塚、ふ、と、云、昔、は、所、実、盛
光、盛、江、討、の、場、と、所、の、人、大、別、の、人、の、旧、跡、と、て、と、思、せ
ひ、く、塚、と、つ、く、其、後、相、換、小、あ、及、地、阿、弥、上、人、

ハコキ他所抄上
虎居元程通
上ノ二條の
代り知の地

實盛

元祖
十代

独於此乃其意とあるらんかのかのくゆり

是の右多々歎未考公の爲りハ法の趣人として云軟

誓言の綱小り之と云 花嚴経曰佛教綱在 昔々

張商英集云漉沈極弱謂之綱矣 佛法ノ具足修成如修得之

唯ひとりゆく人とするふへに綱のゆるぎの意を修成神聖 康業

知人もあつぬ人も後さるや

殊勝成仏の致ハ契ありも悪なるも腐り

○知人もあつぬ人も後さるゝ仏教の事乃るいせしは漢

笙歌遙因孤雲上 聖衆來迎落日前 入日修徳一町し

是ハ木江定基入道寂照入宋一と長元七年小

清涼山の麓にて漸次の時坐る向く又多と云む

司雲のよふふふ楽の事をも人や穿んてり再うりやと

冬河守大江定基ハ参議左大弁式部大帥濟光子

也 圓融院の以乃人々或時妻を具して氣河の任

国より海妻病を交と死と定基是を悲と且

其必乃人民殺生とぬむと見て 殊勝心かゝり

出家と名寂照其後震且よゆら 今昔物語

撰取の光明思ふく 〇其老眼の通流行ふとゆりあり

惠心云我等在彼光中鎮被照耀煩惱障眼不得見

之矣 是等の文をてつ々たり

撰取の光明ハ視經乃光明遍照乃文と

安と云るををりゆりや

シドレル

眼ノ通路ト云ハ
ハナシ共金剛經
三白眼五眼を眼
五眼ハ又云其
五眼等三何レモ
カトテ神通
其通あり
撰取の光明思ふく
〇其老眼の通流行ふとゆりあり
惠心云我等在彼光中鎮被照耀煩惱障眼不得見
之矣 是等の文をてつ々たり
撰取の光明ハ視經乃光明遍照乃文と
安と云るををりゆりや

心經初段

觀經曰尔時世尊告韋提希汝今知不阿弥陀佛去
 此不遠汝當繫念諦觀彼國淨業成者我今為汝廣
 說衆譬云云 去此不遠ハ疏文よ奉云執群疑備ハ
 十不善の異解と明セリ畧ク之ヲ
 疏文曰道里雖遠去時一念即到矣 天台云以佛
 力故欲見則見又光中現土顯於佛力一念能緣言
 不遠也云云

○此のりあるゆるゆくさくふもことなるをさくぬ
 南無阿弥陀佛云云は流とあるは又のりなるが通茂
 上人ハ遊の柳の波と臨行人の上ハ在る上人ハ
 盲亀乃浮木優曇曇花のを得たる地云々

源氏物語云少少の信都なる
 優曇曇花のを得たる地云々
 源氏物語云少少の信都なる
 一をけいこころをそは信都乃あり云云
 細流云信都の云々源氏と優曇曇花云々
 孟津抄云源氏云の云云人けを侍え云云
 かりの信都の云々信都の河よハ似合
 たり云々 多くある雲云云々云々
 法華妙莊嚴王品曰佛難得値如優曇曇波羅華又如
 一眼龜值浮木孔云 優曇曇華梵語也此云靈瑞
 亦云瑞應云云

大菩薩藏經曰此葉似梨菓大如拳其味甘無花而
結子亦有華而難值法華文句云優曇華者此
云靈瑞三十年一現現則金輪王出金輪王出世之時
妙樂云金輪王出大海減少金路現時此華乃出其
阿含曰如大海中有一盲龜壽每量劫百年一遇出
于水面有一浮木只有一孔漂流海內隨浪東西盲
龜一出擬值此孔穿頭向中其木西浮龜或東出圍
繞亦爾雖復差違尚或相值其

玉葉
○同之乃有龜の浮木のやうなるものありて法の時毎
高井上人

▲老のサハシ乃ハ小コくえハ恒トひの洞アナ後ノチ小コあハまり

新ニ集ル糸ノ席ニ云老のサハシ乃ハ小コくえハ表ハ乃ハ淚ナ後ノチよハあハまり

本朝文粹云管三品尚齒會序云遊於勝地一日是
非老之幸哉上下畧

▲安樂園ヤスラキよハせハりハくハくハとハ無ム比ヒの歡ウレシ表ヒとハなハりハぬハ

安ヤス子コ小コハ極トク多クとハつクとハ無ム量リヤウ壽シユ經キヤウ曰ク每ト有ル三サン途ツ苦ク
難ナシ之シ名ナ但タ有ル自ジ然ゼン快クワイ樂ラク之シ音オン是シ故コ其キ國クニ名ナ曰ク安ヤス樂ラク矣ヤ

多タ量リヤウ出デス
無ム比ヒとハたハらハひハるハとハこハくハ歡ウレシ表ヒハ田イハ村ムラよハはハりハとハ

▲痛イタ迴マヅル妄マヤカシ執シツのノ圖エ浮ウのノ名ナとハ痛イタ迴マヅルとハ車クルマのノ怖オソのノめメらハるハ

三サントハ此コノ世セ界カイのノ生ナマ死シのノ乃ハ久クくハめメらハるハとハこハくハ

南ミナミ閻エノ浮ウ授ウケ上ノ原ハラ人ヒト論ロン云ク却シテ々ク生ナマ々ク輪リン迴マヅル不ス絶ツク并ナラ始ハジ如トシ汲ヒク井イ輪リン
妄マヤカシ執シツハ執シツハ深フカくハくハ果ハらハるハとハこハくハ

圖エ浮ウハ此コノ界カイ之ノ白シロ鬚ヒゲよハはハりハとハ

實盛

▲懺悔の廻心 罪を悔く罪愈とひひつゝ心之

懺悔者梵語云懺摩又訳云悔過也二と下界一と

懺悔と云ふ一切経音義云懺除悔梵音也具云

懺摩此云請忍請賢聖或請清浄僧忍受懺悔兵

普賢經曰若欲懺悔者端座思實相兵

▲昔長井の母及別ある大盛の

実盛の武蔵守武庫乃別あるらぬと母及別ある

と云ふ事よく記す。然る別ある懺悔の事宿の人と

是より補す。吾位を及の人格より別あると名のり

なり式小不叶。歟 別あると云ふ意の

或云假令有内膳司而被置別當管領者則云之別

當餘皆同之兵 軍防令義解云謂三關者国司別

當守固之類也三關者伊勢鈴鹿美濃不破越前愛

發是也各有關塞之兵士然今国司別當守固兵

此亦前より比あり少くは欠類をも況つてしとく

盛衰記之趣は次而益光。あを取よせて自号を改

せんといひ發の尉を成よるなりとく

藤原の比は橋の名より二里ありありと云ふ小の

河乃く藤原の安宅少源と

源心よりの情といふをざりし橋は藤原の河乃

河乃集書、新よ入。執政あり。歎ふかしくも。ありの

つゝりてよりなりと云ふ。今の河乃河乃小交り

河乃集書、新よ入。執政あり。歎ふかしくも。ありの

つゝりてよりなりと云ふ。今の河乃河乃小交り

思心ハ悪心
妄念ハ後
世ノ業ヲ
てこし又罪
若シ思付
念ハスニ
廻心

あこ三三
あ比藤原
か否に藤原
いあここの
そのつら

神夜成刻
後夜三宮割

後夜三宮割とゆひて。此、おをを去付るるを以て。此、
公の清氣を所して。此、年こりのをりたるして。
伊物ま字に。翁依倫と云。袖中抄云。おさる
さびい。あさかすさびい。おと。おすさびい。お
さひり。あさかすさびい。おと。おすさびい。お
さひり。あさかすさびい。おと。おすさびい。お
さひり。あさかすさびい。おと。おすさびい。お

極楽より上西
浄土。無常。今
十六の安。今
長ク
苦身。無常
輪廻。古星
南。タリ。又。ハ
此。法。海。の。世。の。の。除。其
苦。身。の。無。常。を。除。其
苦。身。の。無。常。を。除。其
苦。身。の。無。常。を。除。其

法花懺法云諸佛菩薩惠明法水願以洗
真義故。或云。法。海。の。世。の。の。除。其
苦。身。の。無。常。を。除。其
苦。身。の。無。常。を。除。其
苦。身。の。無。常。を。除。其

極楽世界の
苦身。無常。今
十六の安。今
長ク
苦身。無常
輪廻。古星
南。タリ。又。ハ
此。法。海。の。世。の。の。除。其
苦。身。の。無。常。を。除。其
苦。身。の。無。常。を。除。其
苦。身。の。無。常。を。除。其

法花懺法云諸佛菩薩惠明法水願以洗
真義故。或云。法。海。の。世。の。の。除。其
苦。身。の。無。常。を。除。其
苦。身。の。無。常。を。除。其
苦。身。の。無。常。を。除。其

極楽世界の
苦身。無常。今
十六の安。今
長ク
苦身。無常
輪廻。古星
南。タリ。又。ハ
此。法。海。の。世。の。の。除。其
苦。身。の。無。常。を。除。其
苦。身。の。無。常。を。除。其
苦。身。の。無。常。を。除。其

極楽世界の
苦身。無常。今
十六の安。今
長ク
苦身。無常
輪廻。古星
南。タリ。又。ハ
此。法。海。の。世。の。の。除。其
苦。身。の。無。常。を。除。其
苦。身。の。無。常。を。除。其
苦。身。の。無。常。を。除。其

極楽世界の
苦身。無常。今
十六の安。今
長ク
苦身。無常
輪廻。古星
南。タリ。又。ハ
此。法。海。の。世。の。の。除。其
苦。身。の。無。常。を。除。其
苦。身。の。無。常。を。除。其
苦。身。の。無。常。を。除。其

極楽世界の
苦身。無常。今
十六の安。今
長ク
苦身。無常
輪廻。古星
南。タリ。又。ハ
此。法。海。の。世。の。の。除。其
苦。身。の。無。常。を。除。其
苦。身。の。無。常。を。除。其
苦。身。の。無。常。を。除。其

国土衆生、生者皆是阿鞞跋致

彌陀經曰極樂

彌陀經曰極樂

彌陀經曰極樂

平等覺經曰還生我國作阿惟越致矣

一在量壽經曰皆悉到彼國自致不退轉矣

不退といへ極楽といふと之。慈恩の通贊ニ九種の不

退を記さるる畧之。今ハ云量壽佛といへ阿彌陀

梵法翻云在量壽ニ矣。阿彌陀經曰彼佛壽命及其

人民無邊阿僧祇劫故名阿彌陀ニ矣。阿彌陀ハ壽

命無量之の類なり。在量報身如來之。極く極楽

去て悉く在量地之

念く相續する人の念く毎に往生すと

源宣云阿彌陀仏の念ふ一念の往生と云ふて是は

今形を以て念毎に往生の業とする也語燈録 取意

一遍上人云は亦云は念く念くといふと云ふは念則一

往生と云ふなり。山叢林云亦云は念く念くといふは念

といふ。毎念見仏一。毎稱念往生と云ふなり

▲南無と云ふハ即是念命。阿彌陀經云ハ其ハ此等

と云ふの如し。念命と云ふハ念命と云ふなり

善導玄義曰言南無者即是歸命亦是發願迴向之

義言阿彌陀佛者即是其行以斯義故必得往生ニ矣

此言ハ念命ハ正翻。發願迴向ハ義翻。法苑珠

中の發願と云ふ。往生往生の行業と迴向一

行ハ念命と發願迴向と云ふ。阿彌陀仏ハ是レ即チ

還願中致の大なり。即チ是レ其ハ念命と云ふ。即チ

董帝内傳曰
玄女請帝
制甲曹
以備身
礼記儒行
曰儒者
以為甲曹
甲曹
曹カカフト
の
い

ち云く預く。阿彌陀ハ云く

由命ヲ預け云く是ハ佛ノ名也者品是也命
との所ハ云くも。阿彌陀ハ云くは云くは
釈と云く。その阿彌陀ハ云くは云くは
其ハ云くは云くは云くは云くは云くは
云くは云くは云くは云くは云くは云くは
云くは云くは云くは云くは云くは云くは
云くは云くは云くは云くは云くは云くは
云くは云くは云くは云くは云くは云くは

故必得は云くは云くは云くは云くは云くは

南岳者梵語漢語翻歸命 悲華經曰南岳者此

爰定諸佛世尊名号音聲也 法華要解云南岳

者歸依之辭 起信論疏曰歸者是依投趣向義

命者總御諸根一身之要人之所重莫不為先奉此

每二之命以奉每上之尊 無

甲曹ハ屋宇ノ名也。埋木ノ人オモヒカシク沈メテハ西行

儀ノ源也。云々云々云々云々云々云々云々云々

心乃沈のつひ云々 心の沈と云も他の心と云も同

一云くは云くは云くは云くは云くは云くは

白氏文集云構額題鶴鵲池心浴鳳凰

若くは此
つらふを
カフカカ
増羽カカ
夜の綿

朗詠集云物部安興詩苔生石面輕衣短荷出池心
小蓋疎矣 注云池心池底也如潭心矣

桐壘云云心のうらやまひちりりるさふりり池
のふひりくさりりてめくさくつらりのくさ

沈のい井とい通材集云堤をつらとめと通を穴と
倭名抄云械と云 淮南子云决塘發械矣

許慎云械所以通陂竇矣 宝池 短衣を穿て
後撰 小田の苗代ありてぬれぬの沈乃つひいりり

終羅 綿の直糸ハ屋端よはと。室の池ハ柏崎よはと

夜の綿乃直糸ハ為其白ひの濃く令作のちりり
実盛家期の装束云 子家物語云赤地の綿

乃直糸ハ為其あつきの濃くくはくはり
甲の法と云め令作のちりりを作く

盛衰記云赤地の綿乃直直糸ハ黒糸威の濃と
忌十八日より石打の証負く一人進あくる死

せふかよと我りりり 盛長私記云実盛も
青りりりり赤地の綿の直糸ハ為其威の濃と

と帯ハ此糸より鷹石打の証負と負重履乃
らと持連淺葦毛の馬よ令度怖の鞅也

續盛

續盛

麿時
不可有用地
月錦
三入五男神
可作人
十段の深製

夜の綿乃直糸ハ為其白ひの濃く令作のちりり
実盛家期の装束云 子家物語云赤地の綿

小總トヨトミの鞆カマ掛カケと云ふ事なり

今ココの言コトふコトありトせシ 此ココ語コトとトありトありトと云ク

釈シヤク多タ一イチ代ダイのノ所シヨ敷キとト命キミにニしシりリ

釈シヤク門カド正マサ統トウ云ク金カネ口クチ宣ノボ揚トウ五イチ十ジユウ年ネン正マサ教キョウ 兵ヘイ五イチ悔クワイの中ノのチ四シ道ドウ

一イチ念ニョウ弥ミ陀ダ佛ブツ即ソク滅メツ并ヒラビ量リヤウ罪ツイ當トウ麻マ又マタ復フタヘとト 迴クハヒ向ムカヒ發ハツ願ガン心シンハ

誓チカヘ願ガン存ゾン小コ記キとト 迴クハヒ向ムカヒ發ハツ願ガン心シンハ 誓チカヘ願ガン存ゾン小コ記キとト

慚セン愧キ懺ソウ悔クワイのノ所シヨ敷キ 懺ソウ愧キ懺ソウ悔クワイのノ所シヨ敷キ

大ダイ唐タウ之シ身ミ 恥チとト云フとト慚センとトしシハ 恥チとト云フとト慚センとトしシハ

度タク懺ソウ悔クワイトト云フ 沮ソ槃パン經キヤウ曰ク慚セン者シヤ自ジ不フ作サス罪ツイ愧キ者シヤ不フ教ケツ他タ作サス矣ヤ

又マタ云ク慚セン者シヤ内ナイ自ジ羞セウ耻チ愧キ者シヤ發ハツ露ロ向ムカヒ人ニ矣ヤ

又マタ云クもモ孫ソノ系ケイのノ命キミ我ガ破ヤきキしシりリハ源ゲン氏シのノ方カタハ小コ塚ツカ

本ホン而ニ先マシ皇ミカド亦モ爲ナシ后クワイのノ命キミ云フ云フとト云フなりナリ

是コトよりリ以下ノのノ河カ子コ家ケ相サウ抄セウとト云フつツけケりリ

信シ法ポフ國コク住ジュ人ニ平ヘイ塚ツカ太タイ即ソク金カネ刺サシ光クワウ盛セイ清セイ和ワ天テン皇ミカド後ゴ胤イン

本ホン曾ソウ義ギ仲チュウ之シ即ソク後ゴ也ヤ壽シユウ永エイ二ニ年ネン加カ以ヨリ孫ソノ系ケイのノ命キミ我ガ小コ

實マコト盛セイとト討ツク同ドウ之シ年ネン正マサ月ツキ光クワウ盛セイ以ヨリ孫ソノ系ケイのノ命キミ我ガ小コ

本ホン爲ナシ后クワイハ亦モ爲ナシ小コ塚ツカとト云フ

坂サカ東トウとト云フとト云フなりナリ

坂サカ東トウとト云フとト云フなりナリ

異イ本ホン義ギ經キヤウ記キとト通ツとト云フ 回クハヒ事ジ本ホン紀キ及キ古コ語ゴ

拾シツ遺イ天テン晴セイとト云フ 回クハヒ事ジ本ホン紀キ云ク天テン照テウ太タイ神シ從ジュウ天テン窟コク

出イ坐ス之シ時トキ高タカ天テン原ゲン及キ葦ヒ原ゲン中チュウ国コク自ジ得トク照テウ明メイ矣ヤ當トウ期キ之シ

實マコト盛セイ

時天初晴謂阿波礼言天晴也矣

榎口の次郎 榎口次郎兼光安寧天皇後胤木曾仲

三益遠子今升四郎兼光兄也 東鑑云壽永三年

正月廿一日榎口次郎兼光本居が仗りして石川

判友代と征せんが所ふ日比谷内ふより榎口

石川逃亡とらるるむらうく系小ゆり八幡の大後

の志ふかわく本居滅亡のふとせし之れ押て

ゆり入海とらるる小源九郎の家人教軍地にお我

の後そを牛虜已上之男 多かお後及至衰化の

小玉黨が中へ降人となり義仲ふかくとせバ

ゆり首とけりこころ

六十小部く軍とせハ 令義解云在軍者年滿六十免

軍役雖誅滿六十身弱長病不供軍役者亦聽簡出

礼記内則曰五十不從刀政六十不與服戎矣

鬢髮と墨ふらめりつやさく討死ととこころ

童蒙先習とやさくおさゆりりかひんひけ漆

つらりく

輟畊録曰中書丞相史忠武王覽

鏡見鬢髮白傷年且暮尽忠之日短矣因染之使玄

劉禹錫云近來年少輕前輩深鬢鬚作後生矣

氣露風梳新柳髮氷消浪洗舊苔鬚

朗詠集よ都良老の早春の待也。氣を秋と云ハ夫

氣のそんらるる凡の柳と吹らびうらひ髪と

水師を
連波りて
古老説云
門のあを
云々り
鬼乃つけ
香洞を流
みなりと
文実盛が
美盛目比
由とね
入の相
付よあり
大政入通
大臣上舎
小松殿
後、内府
海軍の遺
をねん
いせ
之磨子
前内府
盛子
富門
清家

梳よ似たりと云く。苔生より若くは浪のうらるハ瀬と
流ふよ似たりと云く

古老説云。身者上句と化く下句と化りたり。羅城
門のあをさくろふ。鬼樓上句と化く下句と

云々り。身者思きるう。藤原相よさく。から結
らん化くひく。下句ハ羅城門の

鬼乃つけたりと云く。一と化りたり。良
香洞を流く。云々り。一と化りたり。一
みなりと云く。見江談抄東本藤原

文実盛が流乃由と云く。みなりと云く。ぬをなり
美盛目比の武切は流く。宗盛より北の流乃

由とね。盛長記云。石川敗軍の次々と
入の相。因りて。別当実盛が軍評定。并。款夜

付よありと云く。掌と指く。みなりと云く。見江談抄
大政入通。大臣上舎元

小松殿。後、内府。海軍の遺。をねん。いせ
交る上。の軍評定。其。武切奇く。下

自今以後。二年の軍將。一と云く。右大ね
宗盛小作。北の流乃由と云く。并。壱の相。右打の

証。矢と指りたり。時ふ。肩。一と云く。一。実
盛。一と云く。退。おと云く

宗盛云。一と云く。右大ね。一と云く。一。実
實盛

項羽本紀曰富貴不歸故卿如衣繡衣行誰知之矣
次の漢書朱買臣が傳の語も此の古語をひくつて
より家盛といふ語をよほす

實盛生國の能者の者としてひひり進歩得るつひ
長井の居候とてつりし頃といふ長井の長井の

家盛のいふ所とて云ふは、能者の心城ははるかに
領者韻會曰領録也又統領也 矣 其 形 鑑 者 山 高 山 下 征 所 領 者 亦 領 也 矣 其 形 鑑 者 山 高 山 下 征 所 領 者 亦 領 也 矣

方氏云兼上令下謂之領又官領也又受也 矣 其 形 鑑 者 山 高 山 下 征 所 領 者 亦 領 也 矣

▲りみらふとてつりし頃といふ長井の長井の

後撰集秋ト入る人かゝるものいふは、伊勢が

る。そのいふは、この項根多記の細くあり

▲さんいふは、朱買臣の傳の彼と念持言ふは、ひるゝ

前漢朱買臣字翁子吳人家貧好讀書常艾薪樵賣

以給食擔束薪行且讀書其妻亦負載相隨羞之求

去買臣曰我年五十當富貴今已四十餘女苦日久

待我富貴報汝功妻恚怒曰如公等終餓死溝中何

能富貴買臣即聽去後數歲隨上計吏為卒將重車

至長安詣闕上書待詔公車會邑子嚴助貴幸薦買

臣召見說春秋言楚詞武帝祝之拜中大夫與嚴助

此の事とて
朱買臣の傳
漢書卷九十九
朱買臣傳

實盛

俱侍中久拜會稽太守上謂曰富貴不歸故卿如衣
綉夜行今子何如買臣頓首謝入吳界見其故妻
夫治道買臣呼令後車載其夫妻到太守舍置園中
給食妻自經死買臣乞其夫錢令葬悉召見故人與
飲食皆有恩者報復見前漢書六十四卷
會稽晉心い糸希きよいこと

▲名い末代は有明の 名い末代は屋嶋ははとをぬいさ
心のあり底流く 止規同心水澄清珠相自現一源を

▲+照月の心乃らふふとみゆきやうてけかよえをせけを
高きいこととけしこといほほて実盛とありてし心知を
盛長記よい振ぐ高き等流いけい糸糸とけしこと

中い満りて実盛とけしこといほほて実盛とありてし心知を
記よい高き等とけしこといほほて実盛とありてし心知を

▲あつらんかのまい日本一の別乃者くらんでうはよとて
鞍のお痛よけしこといほほて実盛とありてし心知を

意を中
その思を
あつらん
いほほて
あつらん
いほほて
あつらん
いほほて

子家相済云日本一の別乃者くらんでうはよとて
れとて鞍のお痛よけしこといほほて実盛とありてし心知を
軍争いのあつらんてうはよとて実盛とありてし心知を
をけしこといほほて実盛とありてし心知を
ありてうはよとて実盛とありてし心知を
あつらんてうはよとて実盛とありてし心知を
あつらんてうはよとて実盛とありてし心知を

實盛

畧してよきことなり。盛長私記云日平一の劉の者
池くろ山よとて我々宗る鞍のお悔は押付 上畧
此後ハ一向より一りしと

武備志云軍諍尽備矣 孫子曰軍争之難者以迂

為直矣 李家相説よなるんて云河ハじりハ云云

の治小なるんて之也。今も云云の治小つけくる

うと云若河り。此たろいこ。なるれの治小此知かあ

りぬゆるんた李家相説小河るよよりせし

多の擗と云みあけと 多の擗ハ下敷氏 勝甲氏云

多の擗と云ハ想名く。他今世下の説と多の擗と

とより一二之也と甚擗と云く。俎從云想名と

教と云。下の板と云擗た。多擗た云云

陸佐公石闕銘曰戰同枯朽矣 カウシニコキウニ 班固漢書賈曰鑄

金石者難為功推枯朽者易為力矣

教の形も南を所也 南を所也 と。自生 忘る 孫也と 念信子り時と 教也

竹の差別なく 南を所也 南を所也 竹の音のこ 何れも此録より

鳴れば竹も亦いなりなり 南を所也 南を所也 の音とてし

一休の竹にはすまふこと 是竹の音もあつても 如何なるも 竹

竹の音とてし 未常竹とてし 是竹も亦 竹の音もあつても

のふあつと一休の是竹の音とてし 鳴る竹の音もあつても

鳴る竹の音もあつても 竹の音もあつても 竹の音もあつても

